

新春対談2026

# 未来へつなぐ新たな銅像の2人 渋沢栄一翁と渋沢敬三先生を語る

深谷市長

小島進

成城大学学長

杉本義行



深谷市では、『青淵渋沢栄一先生像』『祭魚洞渋沢敬三先生像』の銅像を青森県の株式会社三沢奥入瀬観光開発から寄附を受け、渋沢栄一銅像を市役所本庁舎西側市民広場に、渋沢敬三銅像を旧渋沢邸『中の家』正門南側に移設しました。今回は、銅像を建立した杉本行雄氏のご子息である成城大学の杉本義行学長を対談相手に迎え、銅像が深谷に移設された意義や渋沢栄一翁、栄一翁の孫で、渋沢家の後継者となった渋沢敬三先生について語り合いました。

渋沢栄一銅像と渋沢敬三銅像  
移設に込めた思い

小島市長 今日深谷へお越しいただき、ありがとうございます。杉本学長は初めて深谷に来たと思いますが、来てみていかがですか。杉本学長 駅から降りてみると、今日はすごく良い天気で、遠くに山が見えてきて、素晴らしい環境だなと思いました。

小島市長 ありがとうございます。

以前、市議会議員をしていた頃、青森県の古牧温泉に何回も行かせていただきました。そのとき、お客様の杉本行雄社長が、古牧温泉のことや小川原湖民俗博物館のこと

渋沢愛を引き継ぎ、広めていくのは、私の使命です。



小島進（深谷市長）

となども、いろいろ説明してくれたのを覚えています。やっぱりすごいかったんですね。

杉本学長 ありがとうございます。

小島市長 杉本学長、栄一翁の銅像と敬三先生の銅像が深谷市に移設されましたが、率直な感想を教えてください。

杉本学長 栄一翁が生まれ育ち、その精神の原点となったこの地に立つ、栄一翁の銅像と敬三先生の銅像の姿を見て、ふさわしい場所に戻ってきたと心感しています。

この銅像は、青森の地で30年にわたり、渋沢家の理念を語り続けてきました。これからは深谷の地で、新しい世代に、道徳と経済の両立、そ

して地域への貢献という、栄一翁と敬三先生の精神を語り続けていくことを願っています。父が生涯をかけて守り、伝えようとした栄一翁と敬三先生の理念が、深谷の地で新たな命を吹き込まれ、継承されることを心よりうれしく思います。

小島市長 ありがとうございます。私は、お父様がそれだけ栄一翁、敬三先生を敬愛していて、心底ほれ込んでいた熱意、情熱を、失礼かもしれないし身勝手かもしれないけれど、お父様の渋沢愛を引き継がないといけないと思って

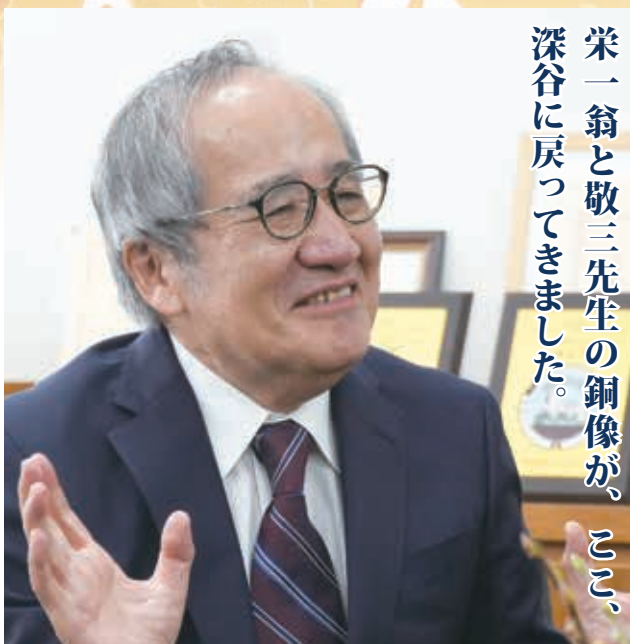
います。

先日、銅像の移設作業をしている様子を見ていて、お父様の思いを少しでも深谷市長として受け止め、そして深谷市民の方々も、この渋沢愛を引き継いでいくのだからなと思いました。

栄一翁との縁が育んだ  
杉本行雄氏の道

小島市長 栄一翁とお父様のエピソードなどを教えてください。杉本学長 父が栄一翁の書生になったのは、栄一翁が亡くなる約

栄一翁と敬三先生の銅像が、ここ、深谷に戻ってきました。



杉本義行（成城大学学長）

1955年生まれ（70歳）、青森県出身。父親は渋沢栄一銅像・渋沢敬三銅像を建立した杉本行雄氏。2022年4月に成城大学学長に就任。専門分野は食料経済学、応用ミクロ経済学。

敬三先生が導いた  
東北の観光事業

杉本学長 そうだと思います。

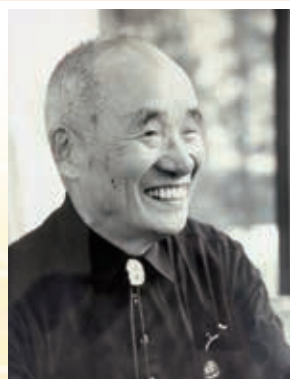
小島市長 敬三先生とお父様のエピソードは何が聞いていますか。

杉本学長 父の観光事業の特徴は、敬三先生の理念の影響を強く受けていました。観光とは「光を観る」すなわち、その土地の素晴らしいものを、それが光て、それを観ることである、

## 渋沢栄一翁と渋沢敬三先生に仕えた『北の観光王』杉本行雄氏

◇1914（大正3）年～2003（平成15）年

杉本行雄氏は、渋沢栄一の書生、渋沢敬三の秘書、そして渋沢家の執事を務めました。戦後は敬三の命により『三本木渋沢農場』の事業清算のため家族で青森県に移住し、三本木商工会議所会頭や十和田観光電鉄社長として地域経済の発展に尽力しました。また、十和田科学博物館や小川原湖民俗博物館を開館しました。その後は、現在の青森県三沢市古間木で温泉掘削に成功し『古牧温泉』と命名、三田綱町（東京都港区）の旧渋沢邸を移築して青淵渋沢栄一先生像と祭魚洞渋沢敬三先生像を建立し、『渋沢公園・祭魚洞庭園』を整備しました。東北の観光拠点を築いた『北の観光王』と称され、質素で親しみある人柄は、地域の人々に深く愛されました。



画像提供：個人所蔵



という敬三先生の言葉を実践しました。残念ながら現在は営業していませんが、三沢には小川原湖民俗博物館を、十和田湖には十和田科学博物館を造り、その後、修学旅行生たちが休める宿泊施設も造りました。普通だと先に宿泊施設を造ると思いますが、まず先に博物館を造るという発想は、敬三先生のアドバイスや教えたのでしょね。

**小島市長** 私が知る限りでは、栄一翁の『論語と算盤』と同じで、金儲けよりも観光、光を観る、もつとえば、最終的には人のために



▲旧渋沢邸「中の家」に移設された敬三先生の銅像を訪れた様子

なる、人に喜んでもらえることが先だったのだと思います。普通だったら金儲けが先で、宿泊施設を造り、人を呼ぶにはどうしたらよいかと考えますよね。話を聞いていて、逆だなと思いました。先に博物館を造ったのは、間違いなく赤字ですよ。そこから始めたというのが、敬三先生の『論語と算盤』なのだと思います。

**杉本学長** そつです。小川原湖民俗博物館などは、まさに敬三先生の考え方を具現化したものだと思っています。

渋沢愛が築いた『渋沢公園・祭魚洞庭園』

**小島市長** 敬三先生が国に物納した渋沢邸をお父様が20年以上、毎年のように大蔵省に払い下げの陳情をしていた姿を見ていましたか。

**杉本学長** 毎年というのは知りませんでした。取り壊しになりそうだったという話が出て、ずっと陳情しているという話は聞いていました。**小島市長** 私は、そこにもすごい渋沢愛を感じました。国の所有物に払い下げの陳情をするという、その情熱や熱意はどこから生まれたのかなと思います。

**杉本学長** 父は54年前、『この地に温泉は出ない』という常識に挑戦し、1000メートル掘って古牧温泉を掘り当てました。そして、敷地内に渋沢邸を移築し、栄一翁の銅像と敬三先生の銅像、渋沢神社を建立し、敬三先生の雅号である祭魚洞を付けた、広大な『渋沢公園・祭魚洞庭園』を整備しました。これは単なる恩返しではなく、渋沢公園・祭魚洞庭園を完成させ、敬三先生の理念を再現する空間を



画像提供：株式会社三沢奥入瀬観光開発

渋沢栄一の孫で渋沢家を継いだ偉人 渋沢敬三

◇1896（明治29）年～1963（昭和38）年

渋沢敬三（雅号：祭魚洞）は、渋沢栄一の孫で、17歳の時に栄一から跡継ぎに指名され事業を継承しました。栄一が帰郷の際は同行し、旧渋沢邸『中の家』をたびたび訪れています。東京帝国大学卒業後は第一銀行などを経て、日本銀行総裁、大蔵大臣（現在の財務大臣）を務めました。戦後、財閥解体や財産税導入の際は、渋沢家は対象外だったにもかかわらず渋沢家も対象とし、また、三田綱町の邸宅を国に物納し、「ニコニコしながら没落していけばいい。いざとなったら元の深谷の百姓に戻ればいい。」と語ったといいます。一方で、民俗学などを研究して文化活動に尽力し、学術団体や研究者も支援したほか、『渋沢栄一伝記資料』（全68巻）を編纂・発行し、栄一の功績を広く世に伝えました。

栄一翁と敬三先生の精神を受け継ぐこれからの教育

つくりたい、という父の情熱の結晶であると私は考えています。

**小島市長** 杉本学長は、渋沢家と杉本家の影響を受け、教育者の中では、特殊な環境の中で育ってきたのだと思います。今、大学の学長として、何か生かせる点や共通点などありますか。

**杉本学長** 非常にあると思います。目的に向かってどうやっていくか、そのためにどのような知識を身に付けるのか、というのも大切ですが、『論語と算盤』ではないですが、

『何のために』という目的が、どのように社会に結びつくのか、というところが大切だと思います。最近、高校生でもソーシャルな考え方に関心を持つ人が多くなっている、時代がそういうところに向いてきている気がします。単に利益を追求するのではなく、それが『何のためののか』というところを自ら問うことが、私が考える栄一翁や敬三先生の教えにつながっているのだと思っています。

**小島市長** 教育もただ教えるのではなく、一番の元、根っこ部分ですね。

**杉本学長** そつはすごく大切になっていきますよね。

**小島市長** 何のために勉強をするかというところから始まって、栄一翁の考えていけば、社会のため、世のため人のために行きますよね。

**杉本学長** 例えば生成AIは、課題を聞くとそれなりに答えてくれますよね。問題なのは、何を問うのか、何を課題とするのか、というところが当然大切です。まさに、栄一翁や敬三先生につながっているのではないかと考えています。

栄一翁や敬三先生の考え方や精神を広めるためには

**小島市長** 最後に、栄一翁や敬三先生の理念をどうしたら身近に感じてもらえますかね。

**杉本学長** これからAIをはじめ、テクノロジーが急速に進歩していきます。その一方で、それを受け止める人間がいます。テクノロジーが人間や社会にとって、どのような影響を与えるのか。仮に負の影響があるなら、それを小さくするにはどうしたらよいか。こういった問いに、ある程度の確信をもって答える学問分野は多くはありません。本学においても、そういう分野を広げていく必要があると私は考えています。まさに、栄一翁の『論語と算盤』や敬三先生の考え方が、今の時代に必要なのでは

ないかと考えます。

**小島市長** 敬三先生が戦後に大蔵大臣になったとき、真つ先に自分の資産を物納できる勇気や日本国民のために先頭になって自分の私財を全部投げ売った潔さ、一文無しになっても構わないというすごさを多くの人たちに分かってもらいたいです。

敬三先生のすごさを今の人たちに、どのように伝えていけばよいのか考えていて、市民の方々に敬三先生の潔さや、世の中に対する考え方を伝えるのは、私の使命だと感じています。銅像移設を機に関係が持てましたので、これからも、ぜひよろしく願います。今日はありがとうございました。

**杉本学長** こちらもありがとうございます。ありがとうございます。

